

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 法政史学第五十号の刊行に際して

著者	伊藤 玄三
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	50
ページ	1-2
発行年	1998-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10563">http://hdl.handle.net/10114/10563</a>

## 法政史学 第五十号の刊行に際して

『法政史学』も、本号で第五十号を刊行することになった。法政大学史学科が独立して以来五十年も迎えることになり、共に慶賀の到りである。

既に、『法政史学』第四十号において、当時の会長であつた村上直教授による「法政大学史学科四十年の歩み」が書かれており、私達はそれまでの経過を詳しく知ることができる。その後十年は、またたく間にうち過ぎた。何よりも、村上教授は二年前に定年になられ、また続いて本年度をもって安岡昭男教授・倉持俊一教授が定年とられる。史学科にとつても、史学会にとつても大きな転機を迎えることになったといふべきであらう。

史学科は、ガリ版刷りの『法政大学史学会々報第一輯』の「発刊の言葉」にあるように、「建学の由来する処深遠であつて中正温健の学風の下に同学の士研鑽に精進せられ、(中略)我等同門同学の学徒は相倚り相扶け一致団結して学に精進し、我が法政大学文学部史学科の存在を永遠ならしめんことを期し、茲に其学会の業績を記録に留めて不朽のものならしめんが為、会誌を発刊することとした」とされるように、極めて格調高く堅実な意図をうたいあげている。勿論、半世紀に及ぶプロセスの中にその初志がどのように実現して

きたか、そして今後はどのように研鑽が積まれるべきかはそれぞれの胸のうちにあるところであろう。唯、五十号の会誌を累ねてきた実積の重みは、これからの法政大学史学科にとってのゆるがぬ基盤をなすものとするべきであろう。

幸いにも、史学科には一九八九年にローマ史の後藤篤子助教授を、また一九九六年には日本近世史の澤登寛聡講師を迎えた。また、来年度からも安岡・倉持両教授退任後の後任者が決定されており、新進気鋭の教員が新たに教育・研究に携わる状況となってきた。五十号を機として、法政大学史学科の発展と、その結実の一つとしての『法政史学』の更なる充実を期し、将来を望んでいきたい。

平成十年三月

会長 伊藤 玄三